

編集後記

『大学院教職研究科紀要』第9号をお届けします。今号には、審査の上、「研究論文」4点、「実践研究論文」1点、「実践報告」2点を掲載することができました。刊行に当たり、ご寄稿いただいた方々、論文審査委員の方々にお礼申し上げます。▲今号には、修了生の投稿原稿3点を含んでいます。HPに掲げられている「執筆規程」にありますように、「執筆者の範囲」には、「(イ) 教職研究科運営委員」、および「(ハ) 上記(イ)を筆頭者として、共同研究・実践を行う共著者」の他に、「(ロ) 教職研究科修了者」が含まれています。投稿論文は、前号から「研究論文」「実践研究論文」「実践報告」の三つのカテゴリーに分類されていますが、いずれも邦文2万字以内、欧文1万語以内の紙幅が用意されています。これを上限として自由に計画してもらうことが可能です。▲去る2月26日(日)午後、この3月で修了を迎える1年制コース(現職教員)の方々から、大学院生活を反芻して感想や意見を頂戴する機会がありました。その席でも「教育実践論文演習」をめぐる意見交換がありましたが、履修された方もされなかった方も、「教職研究科修了者」の投稿の枠をフルに利用していただけることを大いに期待しています。在学中の研究テーマをまとめ上げたものも、新たに芽生えたテーマでも構いません。▲昨年のこと、我が家の南隣の更地には、春の訪れとともに1ヶ月前に壊された建物の跡にも雑草が芽吹き、梅雨の恵みで1mにも育ち、やがて夏の日差しの中で人の背丈を越えるほどに繁茂しました。30年以上も地中に眠っていた種子は、名高い大賀ハスの例にたがわず強い生命力を宿していました。論考も同じことで、その時は書き切れなかったものも、ある時間を置いてみると意外な論点や視点等の気づきもあって、日の目を見ることが少なくありません。▲2017年度から大学院教育学研究科高度教職実践専攻として新たなスタートを切ります。本誌の名称も「早稲田大学教職大学院紀要」に変更されますが、これを機に紀要への投稿がさらに促進されることを大いに期待しています。どうか紀要刊行委員会へも、忌憚のないご意見・ご要望を寄せてください。

(十一コノ山山)